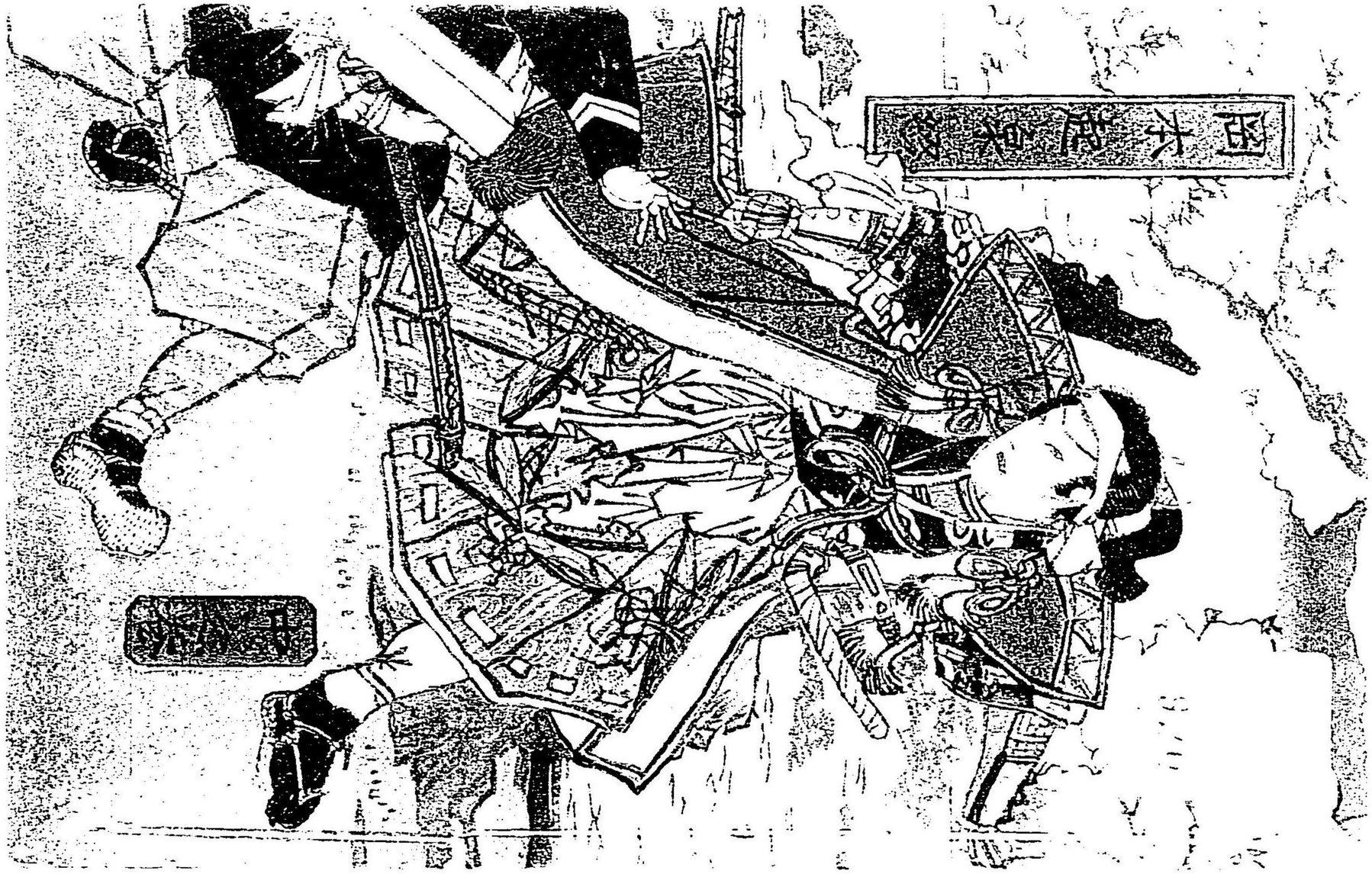
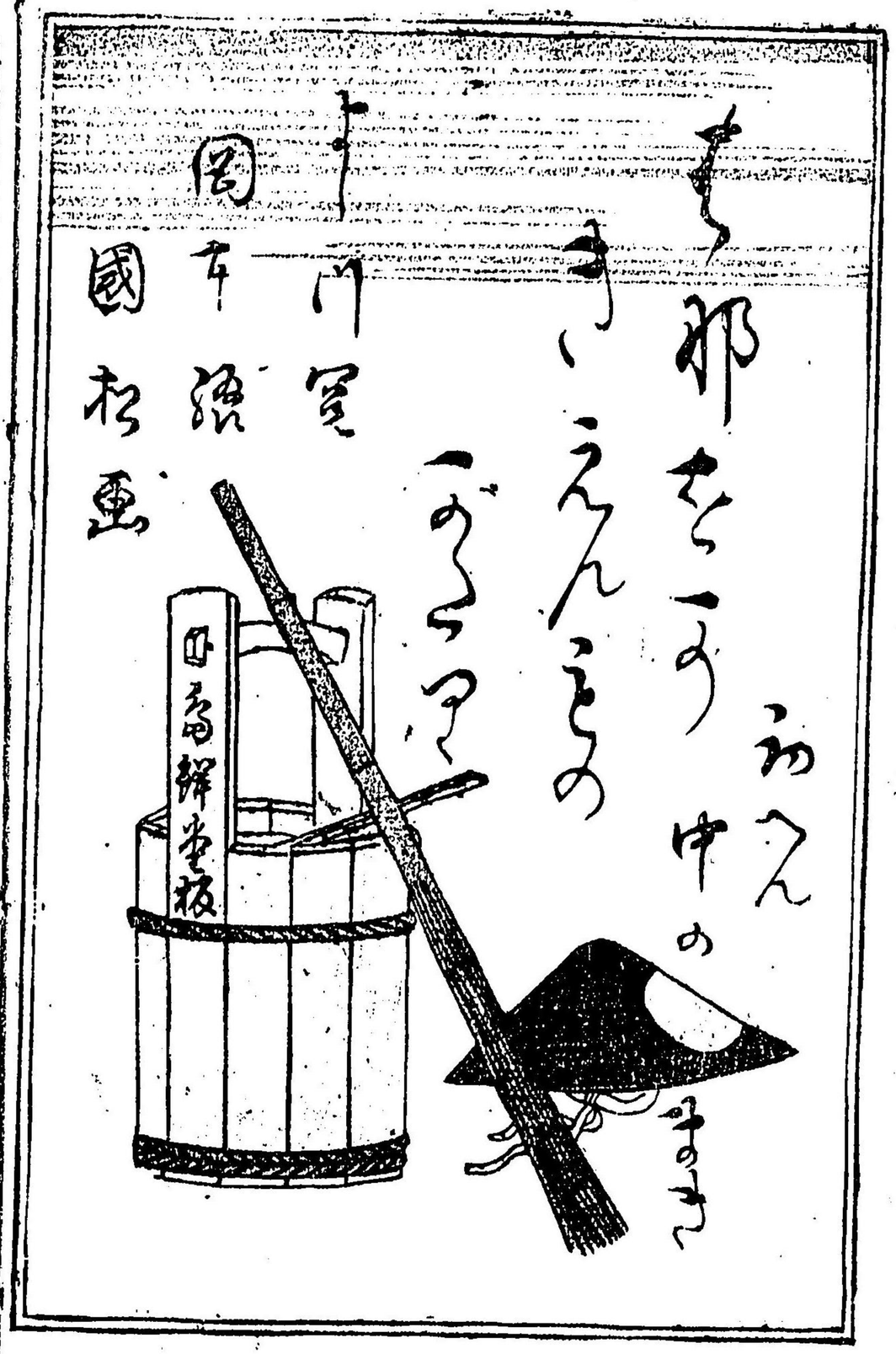




上ものつゞき

奈良の人こゝに酒宴を振舞ひ夢く祝して送へ世が
人ゝ有りしに其中の座中に一人の商人ゝ有り一金を拾ひ如何と自分ゝ
懸物りしゝ武る金の入りる小袋三個いなるゆゑてありしに
安堵して急に大工を雇ひ焼捨りる床柱を奥座敷ゝ
出張の小家を作りて当分ゝ焼き捨ゝ家内
一同起臥せるとゝ思ひしが和尚と僕者ゝ
隠きゝ居ゝ仕様せしを悔しも
生涯ゝ有ゝ仕合せ金の生涯が有りしと
のゝ家ゝ家内ゝ共に焼捨ゝ店の音信ゝ
有ゝらば那の金ゝも

▲戒しる滅へ
此話雑中ゝ有ゝ
巻揚んと思へ
きゝ家内ゝ
城の入り
有ゝ

つぎ三編

用意を通じ形を飾ふ或夜の事お兼の娘お勝の病患を考へ座風で仕切り此前ふ病てある後者を密と引寄せ取り囲し居き表慈と

たるハ不審ぞと彩女が眠りをして何ふと全く二人が共通ふ一時ハクハッと驚ひが身の部屋と狗を捨り初ふ夜ひて夜と照し初ふ

世話

礼を

金十五

がそなる素を呼ふ委細と告げ傾ふ細ひ居へあれど実説と表へ出を時ハ果答二人のみるるとれば

何

云

ふる慈悲

ある相に

お兼の

何と今

さて

保母医元船

に婚き如と愛

どの如夫の彩

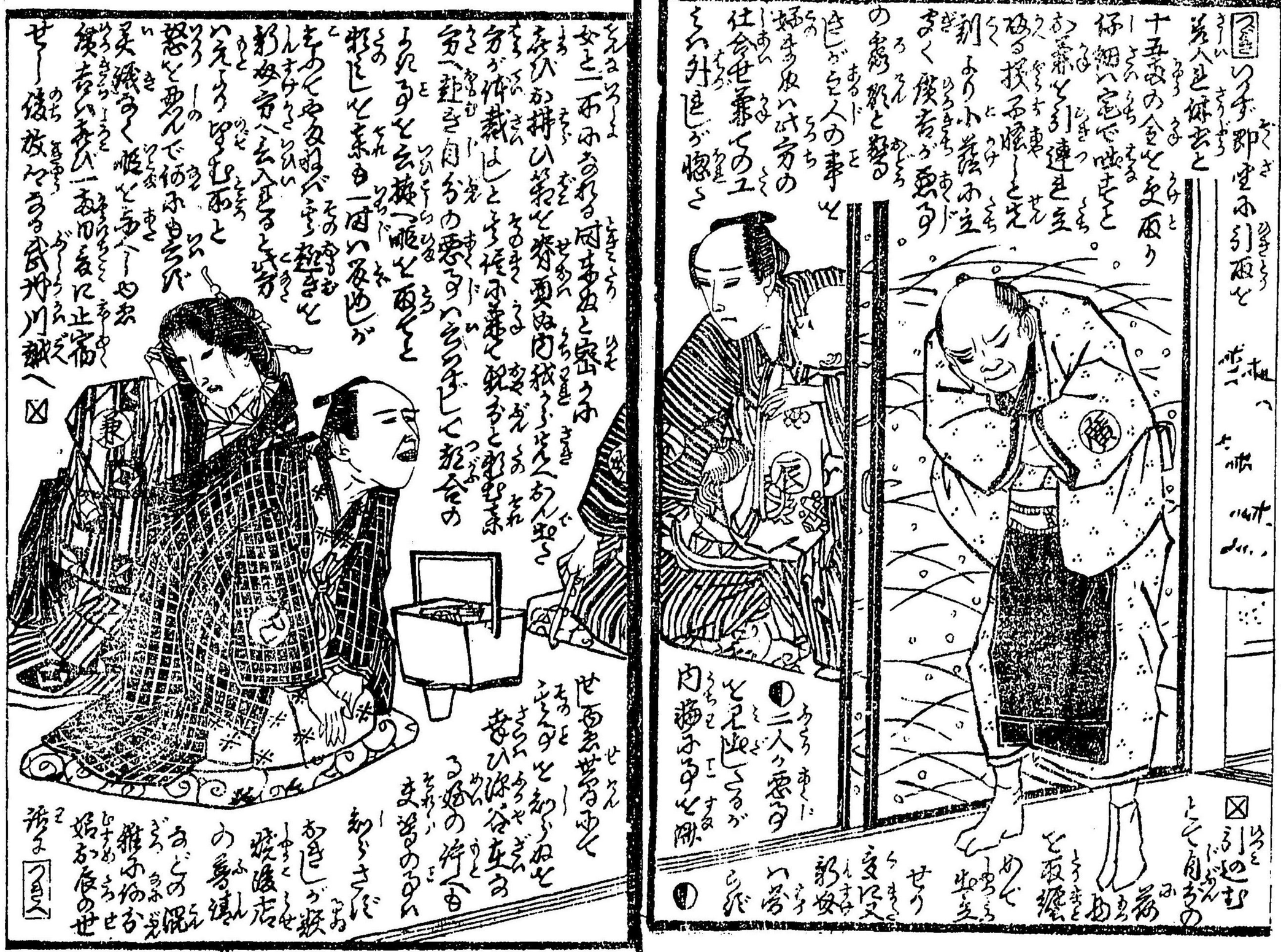
助が彩を添

勤奉をる藏

ふ好んで妹を

表る保母

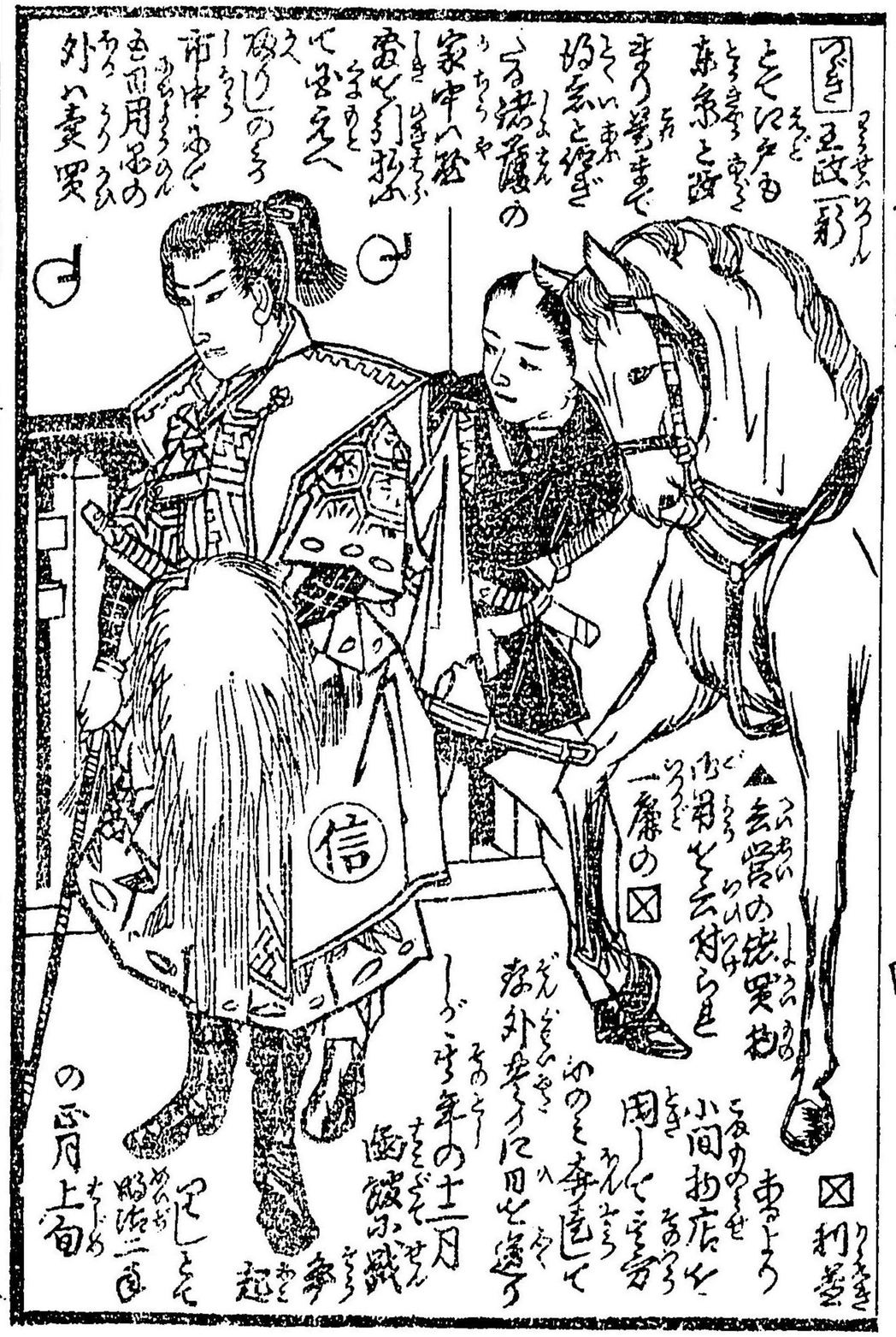
次へ


辰
陳

つぎき 困るとなれば女房お兼が病気あるまと ○きりとまひとりあるくの夜獣
黒家へ来りあり不自由勝のつきあり
お姫様に頼りこれとの出面不合ふ
若干と海へ供の若ふ拵して
お屋と孫若在る茅場
村のお稲方へ遣り者
まこうと大工と急ぎ出
と逸屋ふ新築せるど
急ぎ屋くの為へに来て待へ
ふてる金ふ大
方出ひ拵しも
借金ふれべト
稼ぎして返さんと

▲混雑ふ
安んと人まとりけて
茅場村る姫の為く
早く田舎へ

再び同庄せ世召出ぐ
張りるるふ水戸元年の三月
上旬のへゆゆ徳川孤城の皮
軍ぐ下向一慶応ぐ義沢
さるると逸懸るとて幕府
思願の西さへ今
ゆる戦争と
めん挑拑るよう
市中ゆて家内の
荷拑と面まとふ
花人ふ惜と苦に田舎の
紙色へ遠るるど一方



つゞき 豆政彩

とゝに江戸の赤糸と政まつ髪まで白糸と偽り家中八盛家と門松を飾て出立へ市中ゆゝ毒用品の外い麦買

▲去嘗の疫罹ハ他用を云付ら是一廉の図

図利益

あるよう小間物店を用して売方

のゝ毒色して外出を江戸を遠ず

しゞ年の十二月函館戦争起

の正月上旬

さて人白面君家

弟ハ大金

をかけて普請世と海

ハ彩うゝ家軍の先陣

ゆゝ下向あり長州藩

の隊長戸倉伝人と云

人が彩ゝを喜び笑き

◇

◇

◇

つぎ　ゆるみと成て
返ぶび寄りとそ
再び小石和と成
めるに成変する
色と霜迫の
あるり上へ
家義と変りて
資本を作り
横浜へ赴き新
来あの才覚を
して横毛
と成返さんと如と決し下女と下稚ふ順次
拵るが如き亜陀ふ家義と変拵ひ手間

①我方の子代ふ故
てくれと
牧毛と苦ひ
手代図鑑に
虎と猪と
世間へ帰り
ろを
内家義と
速者と改
一分不孔ふ勤め
鍛ふ
山沢
ふ横

而移りとお屋ふ雑用ふ茅崎村へ送る序で赤安義
ふいりもご商用の起合ふ引渡る者と
知らせ残りの金と拵て横浜へ赴
居岩地の英国人へ又りふ面色て
身の不孝と活りしぶ
へ又りいろて移助ぶ
実
直
ろと知る
ひの
ふすす面
とせんよう①
ふ
ふ
ふ

○爰ふ又図港伊勢侍町に
蓑屋と渡世にする川越屋と
いるい身代はお庭ふてま
ひろ〳〵ひろ〳〵ひろえ〳〵
鎖く外國高鈴と夜引
と亡ぶ昭和七年の春
あるド〳〵ひろ〳〵
そ人ひろ〳〵ひろ〳〵
せ〳〵師い後家の
お嬢ふ万事と病ひ
切ひ〳〵ひ〳〵ひ〳〵十五才に
ある一人の娘お常といふと云関
ひ勧めあげ〳〵時十八才ひるひと之助といふ
丁稚ふ妻ふ妻ふと懐ひん〳〵ひるひ
二人ふ若ふお常ふ十七才ふひると待ひ

しげ出ひい家業向の繁盛ひ
あれば利ひる裏表と庭
ひ入ひ〳〵ひ〳〵ひ〳〵ひ〳〵
日以取引のひめ仕事
ひるへ又りの

精勤と世間表裏
笑と云つて店ひ
おひせんとひふ打ひれ
べ本人さ永新ひ
世分ひ笑ふ世とひ

三月ひ
ひ
ひ

茶店

芳川春濤閣開陽本社発兌

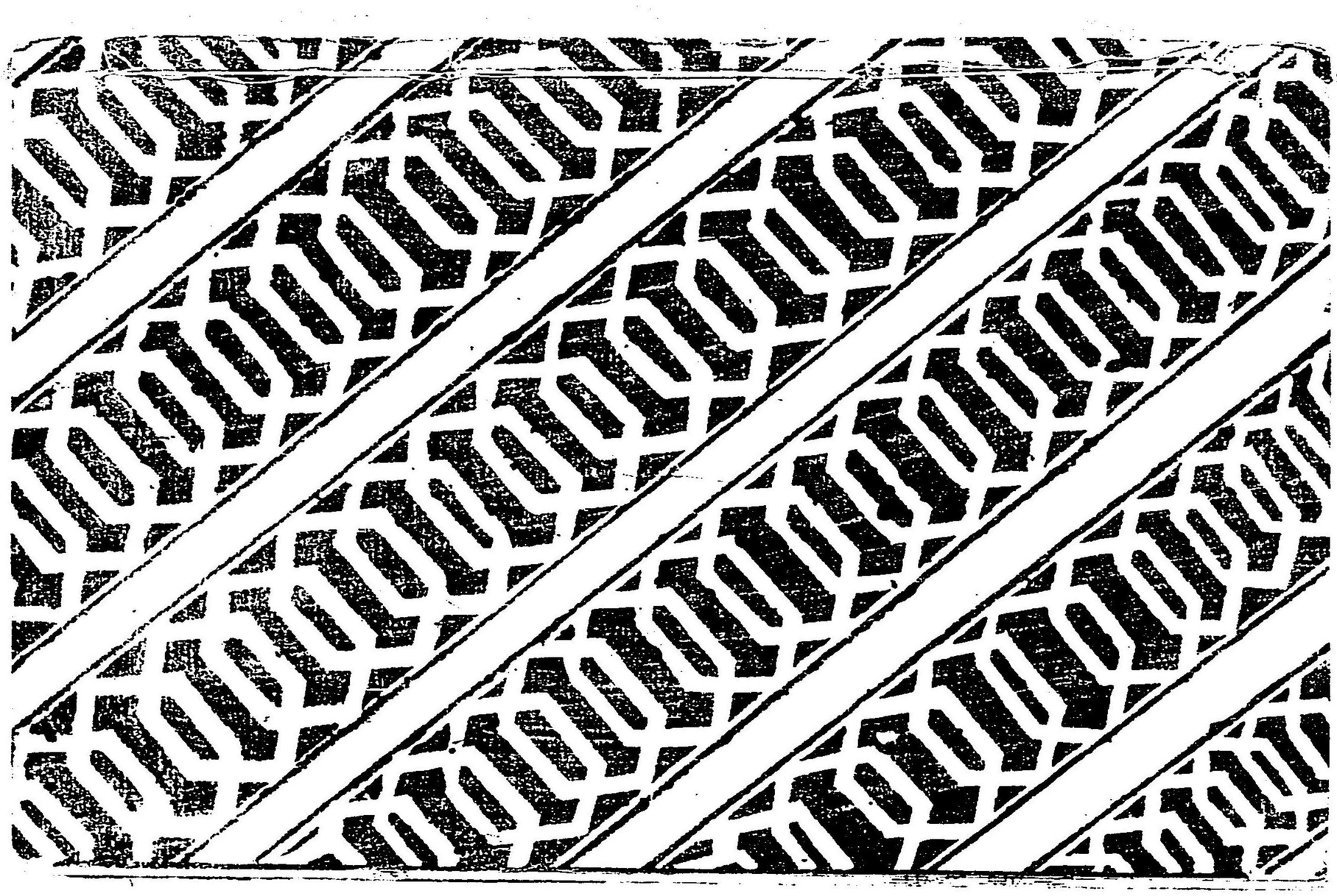
其名も高橋
妻婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原実録物語 三冊

嶋田一郎梅雨日記 五編 東京の開横濱の薫 花岡奇談 三編

白菖阿繁顛末 三編 御所櫻梅松録 三編

坂東彦三郎一流 三編 歌舞伎 府藤栗毛 三編

澤村田之助曙草紙 五編 新板絵入新聞

幻阿竹噺閑書 三編 桜田沉町二番地 編輯人 岡本勘造

川上行義復讐奇談 二編 浅草瓦町十二番地 出版人 嶋島亀吉